

(株)野田バイオパワーJPインタビュー(H28.5.10)

- 岩手県九戸郡野田村に、バイオマス発電所を建設し、平成28年8月に商業運転を開始予定の(株)野田バイオパワーJP大田社長・飯塚専務に、事業内容や港の利用等についてお伺いしました。
- 同社は、久慈港を利用して、燃料となるPKS[パームカーネルシェル(ヤシ殻)]を輸入予定です。

(株)野田バイオパワーJP
代表取締役社長 大田 直久 氏(中央)
専務取締役 飯塚 次男 氏(左)

～インタビュー要旨～ (聞き手:釜石港湾事務所長 小澤 敬二)

Q: 事業概要は?

弊社は、平成24年から、14,000kw規模(一般家庭26,800世帯分)のバイオマス発電所建設計画を進めてきており、現在は、平成28年8月の商業運転開始に向けて準備を行っているところです。

発電所面積は約30,000m²、総投資額約65億円、発電した電気は再生可能エネルギー固定価格買取制度(FIT)を活用し電力会社へ売電予定であり、年間約26億円の収入を見込んでいます。

Q: どのような燃料を使用して発電するのか?

燃料消費量は、全体で年間14.3万トンと予定しています。構成は、未利用材6.6万トン、バーク(丸太外皮)3万トン、剪定枝1万トン、その他一般木材(端材、おがくず等)0.7万トン、PKS(ヤシ殻)3万トンと計画しております。PKS以外は国産で野田村森林組合や岩手県内の森林組合・製材所から大部分を調達予定、PKSはインドネシア等から輸入予定です。国産だけでは全量の調達は困難なので、一部はPKSの輸入がどうしても必要になります。

燃料の種類が多様なのがこの発電所の特徴であり、事業を通じて、地元林業の活性化、地域の復興に寄与できればと考えております。



▲発電所全景(建設中)



▲久慈港利用岸壁

Q: 久慈港利用の概要は？

PKS[パームカーネルシェル(ヤシ殻)]をインドネシア等から、久慈港諏訪下地区岸壁(-10m)を利用して、年間3万トン輸入予定です。具体的には1万トン級船舶を利用して、1回の接岸で4~5日かけて荷役を行う予定で、第1船は、6月中旬に入港予定となっています。荷揚げしたPKSは、久慈港のストックヤードに一次保管し、定期的に発電所まで運搬を行います。

安全・安心な港湾利用のために、久慈港湾口防波堤についても整備促進をお願い出来ればと思います。

Q: 発電所の詳細は？

発電所は、ボイラーや発電機のほかに、保管ヤード、木材を切削・破碎する「燃料製造施設」、バーク(丸太外皮)や剪定枝チップを乾燥させて、燃焼効率をあげる「乾燥施設」、使用した燃料を緑化基盤材に再資源化する「燃料再資源化施設」、冷却水に使用する地下水を真水にする「水処理施設」等から構成されております。運転が本格化すれば、50台/日程度の燃料(木材)を運搬するトラックが行き来することになります。



▲発電所設備(ボイラー)[建設中]

Q: 雇用創出効果は？

事業立ち上げにあたり、21名を採用し、うち野田村出身者は11名となっています。その他も久慈市・宮古市など県内の出身者を中心に雇用しており、業務委託先を含めると約30人の雇用創出に繋がっています。

今後も地域産業の柱の1つとして、地域の活気につながる挑戦を続けていければと考えています。



▲入社式写真(平成28年4月1日)

大田社長様、飯塚専務様 お忙しいところインタビューさせて頂き、ありがとうございました！